



2037.5年に  
生きる三子



2037・5年に生きるミチ



## プロローグ 1

いつもより大きく膨らんだカバンを前に、ミチは正座している。

「さて、行くか」

今日は七月一日の土曜日。二〇一七年も、もう半分終わった。来週の月曜日からは期末試験。高校二年のこの時期になると、大学受験がなんとなく近くなり、学校の空気も重く慌ただしくなってきた。

制服を着て出かけようとしているミチに父親が声をかけた。

「ん？ 土曜日なのに学校か？ 女子高生も大変だなあ」

「来週から期末試験だから友達と一緒に勉強するの」

「ふーん」と言いながら父親はテレビのスイッチを入れてソファに腰を下ろした。

今度は母親が出てきて「ちゃんと勉強しなさいよ。遊びにいくんじゃないよね」と釘をさした。

「行つてきます」とミチはそそくさと玄関から出て行った。そして、玄関のドアが閉まろうとしている隙間から少しの間父と母の横顔を見つめた。

『お母さん、お父さん……ちよつとだけいなくなるけど心配しないでね』

ミチは心の中でそう呟いて歩き始めた。

どこに行こうか。

カバンの中には三日分ほどの着替えと、多少のお金が入っていた。

『プチ家出っけというんだっけ。こういうのって』

ミチは駅に向かう前に珠子の家に立ち寄った。

そして、カバンから「交換日記」を取り出して、珠子の家のポストに入れた。交換日記なんていう前時代的なものを珠子とミチは高校に入ったころから続けていた。そこにはミチは自分が思っていることを素直に書けた。珠子はよく理解していないかもしれないけれど受け止めてくれる唯一の友人だった。

「ちよつとだけ旅に出ます。心配しないでね。親にも言わないで」と昨夜書いたのが最後のページだ。

行く当てがあるわけではなかったのですが、なんとなく東京を見渡したくてスカイツリーの展望台に行ってみたが、何も思いつかなかった。

スカイツリーを出て、ミチはしばらく歩いた。

墨田区・向島――

『不思議な町だなあ』

とても車など入ってこれないような細い道を歩きながらミチは歩いた。普段住んでいる新興住宅地とは様子が随分違う。狭いからだろうか。やたらと三階建ての家が多い。でも高いビルなどはほとんどない。

歩いていると小さな公園に出た。ミチはちよつとおながが空いたので、ベンチに座ってコンビニで買ったサンドイッチをほおぼった。

「おじょうちゃん、百花園に来たの？」突然、背後から声をかけられた。

「ひやつかてん？」口にサンドイッチを入れたまま驚いて振り返った。そこにはロマンスグレーの髪を後ろで束ねたちよつとダンディなおじさんがニコニコしながら立っていた。

「ははは、百貨店じゃないよ。向島百花園。この小さな公園も昔はその一部だったんだけどね。

入り口はあっち」そう言って指さされた方を見ると、確かに立派な木の板に毛筆風の文字で「百花園」と刻まれている。

「いえ、別に……」ミチはどう答えればいいか、まさか「プチ家出中です」とも言えずに黙った。

「おじさんはさ、代々この辺りに住んでいるんだよ。昔からこの百花園と関わりがあつてさ。暇だから案内してもいいけど、どう？」

このおじさんは完全に怪しい——はずなのに、とても柔らかない空気をまとっていることに引きずられたのか「いいんですか？」と答えてしまった。

「じゃ、行こうか」そう言っておじさんはすたすたと入り口の方に向かって歩き出した。入園料を払う受付も「よお！」と声をかけるだけで通り過ぎる。ミチもその後が続いて百花園に入った。

緑があふれていた。先ほどまで歩いていたごちゃごちゃした不思議な街並みの中にあるとは思えない。かろうじて百花園を囲んでいる植木の壁の向こうに数少ない高いビルと少し遠くに見えるスカイツリーがなんとかこの場所が東京であることを示していた。

「江戸時代に作られたころには、梅ばっかりだったらしいけど、その後、いろんな人が梅だけじゃつまらんとっていろいろな木や草を持ち込んで、こんな感じになったんだよ」

確かによく見ると様々な木や草花がある。名前はミチには分からないけれど。

「そして、草木だけでなく、こういう石碑も徐々に持ち込まれて、今や三〇個くらいある。ま、粋な市井の人々の憩いの場だったから、ある意味勝手に持ち込まれてきたようだけどな、ははは」  
色々な文字や短歌のようなものが刻まれたかなりの数の石碑があるが、もしこれから新たに石碑を持ち込みたいという人がいれば、よく見ると、まだ空いている場所はちらほらある。

「え？ ここの石碑って勝手に持ち込まれたんですか？」

「ま、そんなもんだ」

百花園は小さな庭園なので、一五分も歩くと一周して入り口に戻ってきた。

「ありがとうございます」

ミチはこの場を早く離れて早く一人になりたいと思った。

その時――

ニコニコしながらミチを見ていたおじさんの背後に目が行った。「あれ？」と思った。

『さつきはあそこにあんな石碑ってあったっけ？』引き寄せられるようにミチはおじさんの横を通り抜け、最初に歩き始めたあたりに行ってみた。ちよつとめまいを感じたような気がした。その石碑の所まで行くと、その先の道の両脇に明らかに先ほどは無かった「増えた」石碑がいくつも見えた。



「え？　なんで？　いつの間に？」

ミチは、同じ道をもう一周歩き始めた。

「おじようちゃん！　時計回りのままもう一周いつちやうと……」

おじさんが何か叫んだが、途中でその声は消えた。ミチは夢中で石碑の数を数えながら歩いて行った。「四五個ある。増えている」そう思ったときには、入り口までたどり着いていた。

おじさんはいない。

おじさんがいないだけでなく、なんか変な感じがした。入園料を払う受付の感じにも違和感を感じた。

「何かが変わった？」

そのミチの違和感はサンドイッチを食べた小さな公園に戻った時に確信に変わった。

ベンチが全く違う黄色の樹脂製のものになっていたのだ。

「間違いなく古い木のベンチだったのに」

ミチはそのベンチに座り込んで周りを見渡した。どんな建物に囲まれていたっけ？　こんな感じの家だっけ？　さっぱり思い出せないが、「こうではなかった」という気持ちだけは益々強くなっていた。

ミチはスマホをカバンから取り出した。電波が入っていない。

何が起きたのだろう。ミチはしばらく呆然と座っていた。

「ミチー！」

ミチの目の前に見慣れたメガネをかけた顔の少女が立っていた。

「え？ ……珠子？」

「やっぱりミチだ！ よかったあ！ うれしい！」 珠子は跳びはねるようにしてミチに駆け寄り抱きついてきた。

「珠子、どうしてここが？」

「そりゃ分かるよ」 ミチの横に座った珠子が理由にならない答えを言った。

「交換日記に『ちよっとだけ旅に出ます』なんて書いていなくなっちゃうんだから。みんなどんなに心配したか分かってるの？」

「ごめん……でもまだ半日も経ってないよ。早いね。短い家出だったなあ。プチにもなっていないじゃん」

ミチは空を見て呆れるように言った。

「何言ってるのよ、ちよとど二〇年も行方不明になっていたくせに」

珠子が怒ったように頬を膨らませ、ミチの目を覗き込んだ。

「え？」

「ちよとど二〇年。同じ日。今日は二〇三七年の七月一日だよ！」

## プロローグ2

「はあ？ 二〇三七年??」

「ミチ、あなた、どうやってこの時代に来たの？ どう見てもいなくなった二〇年前の高校生のままだし」

「二〇三七年だつて？ 本当？ 信じられない」

「……うん、確かに今が二〇三七年だつていうことを証明するのは意外に難しいな」

珠子がそうつぶやくと、突然目の前の空中にスクリーンが現れて、「2037年7月1日（水）」というカレンダーらしい文字が現れた。

「わ！ 何？ これ」

「そうか、ミチがいなくなった時代はスマホ全盛だったよね。今は個人でわざわざスマホを持ったりはしないの。会話の内容やジェスチャーで『街』自体が判断して、こんな感じで必要な時にどこでも画面が現れて色々教えてくれる。レトロ好きなマニアは未だに最後のバージョンのスマホとか持って見せびらかしてるけどね」

ふと空を見ると何かがいっぱい飛んでいる。

「あ、あれも確かに二〇三七年らしい光景かもね。乗用ドローンって言うていいのかな。空飛ぶ個人用の車みたいなものよ」

「あ……」

ミチが見たのはスカイツリーだった。あのスカイツリーが明らかに（二倍くらいに）高くなっている、それも二本になっていた。

「二本目ができたのは二年前。あのとつぺんから見える細い管が宇宙エレベーターになっている、衛星が飛んでいるあたりの宇宙まで伸びているの。今、観光でも大人気」

ミチは混乱のまま、信じざるを得ないと思うようになっていた。

「本当に二〇三七年なんだ……」

「そう！ とりあえず信じておいて！ さ、時間がないかもしれないから、行くよ」

そういつて、珠子はミチの手を引つ張つて歩き出した。

「どうやらどうやってこの時代に来てしまったか、ミチ自身も分かっていないようだから、逆に言うといつ元の時代に戻っちゃうかも分からない、っていうことじゃない。だから、この時代にいるうちに……」

素晴らしいながら珠子は担いでいたバックパックから、あの「交換日記」を取り出した。

「ここにミチが書いていたことが、この時代だとどうなっているかを見せたいの！ 急ぐよ」

手をつながれたままのミチは、速足で速度を合わせながら「書かれていたことって？」と尋ねた。

「なんかね、いつもいつも『この世なんて』とか『人類なんて』とか『将来なんて』とか文句と  
いうか心配というか失望っていうのか、とにかくいっぱい書いていたじゃない。私は『なんて族』

だと思つてた。だから見せたいの、この時代を！」

確かに交換日記と言いなから、いつも他の人には話せないような自分の考えを書きながつていたような気がする。ミチは小学校のころから本の虫で、歴史や哲学の本まで読み漁っていた。芸能人の話などを同級生が楽しそうに話しているのに合わせるのが苦痛だった。そのうち、学校もこの世界も、そしてこれからの自分の人生も、なんとなく嫌になつてしまつていた。それが今回プチ家出をしてしまつた原因だった。

「見せるつて、何を？」

「とにかく、行こう！」

歩きながらちよつとは落ち着きつつあるミチの中に疑問が湧いてきた。

「ところで、珠子はなんでここ、というかこの時代にいるの？ 珠子だつて見た目は高校生のまじじゃない。百花園で私の後をついてきたの？」

「その話も後、後！」

# いいところを失った日本人ばかりの日本なんて

浮世絵師 ステラさん

ミチと珠子は速足で歩き続けている。

「ミチ、五二ページ！」珠子が交換日記をミチに手渡す。

「五二ページ？ 見ればいいの？」

「まずはステラさんのところに行くから。ここから近いし」

ミチは歩きながら読むのは無理があるので、そのページを開いて立ち止まった。

ミチが書いた文章があった。

【私は歴史や伝統が好き。日本のも世界のも。歴史の本とか読むと、昔の日本人はいいなあ、つてよく思っちゃう。そういう良き日本人ってほぼ絶滅しちゃったのかな。少なくとも私の周りにはいないな。人だけでなくて、昨日見たテレビでもやってたけど、日本の伝統工芸でも後継者がいなくて消えかけているものが沢山あるみたい。かといって外国の文化や人が沢山入ってきているわけではない。守りもできず変化もできない日本なんて……】

「こんなこと書いていたんだ。忘れてた」

「学校生活中心だと身の回りには日本の伝統もなければ外国人に触れ合う機会もほぼない。

ふと、道行く人に目をやると、外国人が沢山歩いていることに気が付いた。見た目は日本人っぽい人も外国語を喋っているのが聞こえてくる。

「外国人の人が多いのね。観光客？」

再び二人は歩き出して、その外国人の人混みの中をすり抜けていった。

「ううん、大体はここで働いているというか学んでいる人」

「その、なんとかさんっていう人も外国人？」

「ステラさんね。日本人のおばあちゃん。須寺さんっていう漢字が苗字。着いたわ」

そこには「UKIYOE kobo」とルビが打たれた「浮世絵工房」という看板を掲げた建物があった。

「ステラばあちゃん」

珠子が声をかけると、作務衣風の着物を着た女性がこちらを向いた。背の高い青い目の人と話している。

「たまちゃん。何か用？」

「ちよつと友達に工房を見学させたくて連れてきたの」

「ばあちゃんは、今日は立て込んでいるからあまり相手できないけど、どうぞ」

そういつてステラさんは外国人とまた熱心に話し出した。ステラさんは日本語で、ヨーロッパ人はどうやらイタリア語でしゃべっているようだ。

「すごいね、ステラさんってイタリア語？ もできるんだ」

「ははは、そうね、これも二〇三七年ならはだよ。同時通訳機を耳に入れてるの。相手の外

国語は聞こえないようになってるから、言ってみれば吹き替えの映画のような感じで会話してるんだ」

そこにアジア系の女性が割り込んできてステラさんに話しかけた。中国語だろうか。何も問題がないように会話は続いている。

その横ではアフリカの人だろうか、わき目もふらずに彫刻刀で板を削っている。

「あの人はまだここに来て日が浅いから、浮世絵の版作りには超音波レーザー彫刻刀を使っているって。自分の手だけでやれるようになるにはもう少し日が必要ってステラばあちゃんが言った。こういう伝統工芸の世界では、『素人は機械に勝てない、機械は達人に勝てない』っていう言い回しがあるんだって」

「へー」としかミチは言えない。

部屋の奥から、金髪の女性が大きな紙に書かれた浮世絵を持ってやってきた。それを入り口近くにある装置にかざすと、その装置のディスプレイに「58・24」という数字が表れた。それを見た女性はちよつと残念そうに戻っていった。

「あれは『浮世絵率測定装置』。浮世絵らしい絵かどうかを一〇〇点満点で判定してくれるんだって。素人が書くとなかなか五〇点はいかないらしい。」

「何、それ？」

ミチは意味がよく分からなかった。そこに、インド人らしき人がうれしそうに紙をひらひらさせて絵をもってきた。「ステラさん、できた！ これ、どう？」とまだ話しているステラさんに



見せた。「お、いい感じじゃない？　ビハール州のマドバニペイントをベースとした浮世絵になっているよ！　たぶん、ちょうど狙いの八〇点くらいじゃない？」

「私もそれくらいの点数だと思う！」と言って、その絵を『浮世絵率測定装置』にかざした。「81・57」という点数が表示された。

「あら、思ったより浮世絵になっちゃったね。ま、いいんじゃない？」ステラさんはインド人の肩を叩いた。

「あの判定装置は単なる機械というより、ステラさんのもう亡くなったお父さんやおじいちゃんの判定眼が学習されているんだって。その辺の鑑定士よりはずーっと確かだって」と珠子は自分のことのように自慢げだ。

「そうそう、たまちゃんに新作を見せてあげる」そう言うと、人と同じくらいの大きさの彫像をイタリア人が持つてきた。

「立体浮世絵かあ」珠子は興奮した様子で叫んだ。二次元の絵でしか存在していなかった浮世絵の立体化にステラさんは挑戦しているようだ。

「判定装置でどんな方向から鑑定しても九〇点以上をたたき出すのよ。すごいでしょ」とステラさんは胸を張った。

色々な国の人が自分たちの文化も持ち寄りながら日本の伝統文化を成長させ受け継いだり、新しい表現に挑戦している——ミチはちよつと感動していた。

その時、『浮世絵率測定装置』が勝手に動いて点数を表示した。たまたま測定場所に立つて

いたステラさんの顔の「浮世絵率」を計ってしまったのだ。

《98・14》

その得点を見て、ステラさんは装置をコツンと叩いて言った。

「こいつう！ 失礼だな。どうせ私は歌麿の『山姥やまんばと金太郎』の山姥によく似ていると言われるわよ。フン！」

# 食べるためだけに学び働くなんて

サバティカル高校生 サクラ

ミチは自分でも浮世絵を書いてみたい気がしたが、珠子が「ミチ、次、行くよ！ 時間がない『かも』しれないんだから」と言っつて、店を出た。

「そうね、次はサクラちゃんのところがいいな。はい、交換日記の七一ページ!」

ミチは交換日記のそのページを見た。

【なんで学校へ行って勉強するのが当たり前なんだろう。たぶん、いい大学に行つて、いい会社に入るため、というのがみんなが思っている理由なんだろうな。でも、いい会社に入るのは、結局はお金のため？ お金と引き換えに自分の人生の時間を渡しちゃつて生きるため？ そんな食べるためだけに勉強したり働くなんて】

ミチはかろうじて不登校にはなつていかなかったけれど、ここに書いたことが学校の勉強に身が入らない大きな原因ではあつた。

「たまちゃん!」

背の高い男性に声をかけられた。

「哲夫にいちちゃん! 向島に帰つてきたの? 久しぶりじゃない?」

「そうだな、二年ぶりくらいかなー。ボランティアのハシゴをしているうちに二年経っちゃった。ん？ 彼女は？」

「ミチ。哲夫さんの話も聞きたいけど、ちょっと急いでいるから、またね」

「相変わらずだなあ、たまちゃんは。ゆつくり話をするのはまた今度として、いいものあげる」

そう哲夫が言うと、空から飛行物体が現れて、哲夫にバックパックを渡した。哲夫と珠子にとつては当たり前のことのようだが、ミチにはいちいち驚きだ。

「えーと、これこれ」哲夫がバックパックの中から小さな木の箱を取り出した。

「アフリカ西部のトーゴに伝わる宝石箱。この中に大事なものを入れておくと、ずっと幸せでいられるという言い伝えがあつて、本来は家族にしか渡さないものなんだつて。半年前に水路調整のシステム開発をボランティアでやつて、現地の人からもらった。すごく感謝されたみたい。ほら、たしかたまちゃんのお母さんだつて？ 宝石箱収集が趣味なのは。お母さんにあげて。俺が持つていても仕方ないし」

珠子はその箱を受け取り、「ありがとう！ きれいなねー。見たことないよ、こんなの。お母さんもとっても喜ぶと思う。これつて、VPも沢山もらえたんじゃない？」

「そうかもね。後でVP口座がいくら増えてたか見てみるよ。忘れてた」

「VP？」ミチにとつては分からないことと分からない言葉ばかりだ。珠子は説明する気が今はないらしく、哲夫と別れて先を急いだ。

三階建ての一軒家に着いた。

ドアのベルを鳴らすと、中からミチたちと同じくらいの子が出てきた。

「サクラ。こつちがミチ」 最小限の紹介だけ済ませて珠子は「サクラ、どう？ 例の隕石着陸衛星の実験の進み具合は？ 実験、見せてくれない？」

「いいよ、もちろん。でも、わざわざ来なくても、ちょうどいまから実験の中継を世界に流すところだったんだけど」

三人は狭い階段を上って三階の部屋に着いた。

そこは色々な機材や工具が所狭しと散らかっている実験室だった。普通の家の三階にあるとは思えない。

「では、いよいよ本日の実験を開始しまーす！」 サクラはミチや珠子に向けてではなく、中継先から見ている世界中の人にアナウンスした。

部屋の真ん中の机の上に三〇センチほどの円筒のものが二つ立っている。ミチはなんだろうと  
思っ、その筒を覗き込もうとした。

「そこから打ち上げるのよ。危ないから、ちょっと離れて」

その筒の真上の天井には窓があった。窓がすーつと開き、空が見えた。

「では、始めます。最初に隕石着陸衛星をこつちの筒から打ち上げ、その〇・一秒後に隕石に相当するこの石をこつちから打ち上げます。空中でうまく隕石着陸衛星が後から打ち上げられた隕石を追跡して、うまくキャッチできたら、拍手喝采！」

十、九、八……カウントダウンが始まった。世界中の沢山の人が唱和している声がどこからか

聞こえる。

プシュ、プシュ、と二回音がして、何か天井の窓から真つすぐ空に飛んで行った。

サクラは部屋の真ん中に行き双眼鏡を持つて窓の穴を見上げた。しばらくして「あ！ パラシュートが開いた！ 成功……みたい！」と叫んだ。部屋の中は世界中からの拍手で満たされた。

ミチにはサクラがなんの実験をしているのかさっぱり分からないが、「隕石」とか「衛星」とか言っているからどうやら宇宙関係の実験のようだ、ということだけは想像できた。

「サクラはミチと同じ一六歳なのよ」珠子がやつと説明を始めた。「で、サバティカル中。」

「サバティカル中？ サバティカルって、えーと、確か大学の先生とかが一年とか自由に旅してちよつとゆつくり人生を考える、とかいうやつ？ サクラって高校生じゃないの？」ミチは訝し気だ。

「当然中学校までに義務教育は終えて、その間にサクラは宇宙工学のドクターも取つて。そして今はサバティカル中。こうやって、宇宙の実験をしながら、その後は何をするか模索中だつて。ね？」珠子が解説した。

「まあね。この実験を終えて、実際に隕石が大気圏で燃え尽きる様子をこの『隕石着陸衛星』で測定できたら、その後は宇宙モノをやるか深海モノをやるかはまだ決めていないけど」

ミチには高校生の女の子がどうしてそんなことができるのか、そして、それ以上にどうみても高価なこの部屋の数々の装置をどうやって手に入れているのかが不思議でならなかった。この家がそれほど裕福とは思えない。

それらの疑問を立て続けに珠子とサクラにぶつけてみたが、サクラにとつてはミチというこの子がどうしてそんな「当たり前」のことを聞くのかが理解できなくて、話がなかなかみ合わない。

「サクラ、ありがとう。ミチには後で説明しておく」そう言つて珠子はミチを部屋から連れ出した。

二階の階段を降りるときに、ドアが開き、おじさんが顔を出したが、ミチたちの様子を見ると、「いらつしやい」とだけ言つて、またドアを閉めた。

「お父さんは完全隠居になつちやつて。世界中でやられている活動を部屋で見てもV P投資ばかりしているの。自分でも何かやればいいのにね。昔は本当に色んなことをして活躍していたって本人は言うけどね」サクラはちよつと呆れた様子で肩をすくめた。

サクラと別れ、珠子とミチは次に向かった。

珠子は歩きながらちよつと長い説明を始めた。

「二〇三七年の今は、ロボットの進化なんかで、人類は『食べるため』だけに働く必要はなくなつたの。自然エネルギーの活用も進んでエネルギーもほぼタダになつたし」

そう珠子が切り出すと、歩いている二人の前にスクリーンが現れ、どこかの国の農場で自然エネルギーを使つて働くロボットたちの様子が映し出され、しばらくたつと消えた。

「昔でいうと『ベーシックインカム制度』がどの国にも定着した。つまり、最低限の生活は何もしなくても送れる。自然エネルギーを使つて、ロボットが働いて、食物や必要なものは作つてく

れる。もちろん、メンテナンスも自動よ」

時々すれ違う人たちと軽く挨拶をかわしながら珠子は説明を続けた。

「それ以上に『お金ってあまり貯めすぎても意味ないじゃん』っていう当たり前のことに人類はやつと気がついて、それが制度なんかに反映された。もちろん、今でもいわゆる『金の亡者』的な人はいるけど、みんなからは単に蔑まれてる。大事なものは、いかに『価値』を作るかね。お金ももともとは『価値』を交換するための手段だったはずだけど、いつの間にかお金自体が目利化してしまってたのよね。千分の一秒の差の株の取引きで儲ける、なんて、なんの価値も生まないじゃない」

ミチは珠子の話は大体は分かる気がするが、正直なところモヤモヤ度は上がったままの状態で頷いていた。

「そこで生み出されたのがVP。バリュー・ポイント<sup>V P</sup>っていう制度なの。元々は二〇一〇年くらいから広まりだしたビットコインがベースになったらしいよ。VPは価値を生み出す人に他の人や機関から直接振り込まれるポイント。で、『価値』は大きく分けて二種類。一つは『人が喜んで感謝したりしてくれること』。そして、もう一つは『人類の未来への挑戦』。クラウドファンディングの発展形とも言えるかもね。ただ、二〇一七年ごろと大きく違うのは、みんなの気持ち、つまり『ありがとう』っていう気持ちを定量化してポイントとして算出する技術が発達したの。むかし、あ、ミチがいた時代もそうだね、フェイスブックの『いいね』みたいなものだけど、適当な『いいね』のポイントは少なく、心からの感謝は大きなVPが得られる。そのVPを使



えば、大抵のものは手に入る。サクラがやっているのは『人類の未来への挑戦』の領域ね。個人個人からの直接のVPもあるけれど、色んなVP投資機関からの投資も多い。だからあれだけの実験装置もそろえられるのよ」

すごい、すごすぎる——ミチは言葉が出ない。同い年の女の子がみんなの感謝や期待を背負って「人類の未来への挑戦」で「個人で宇宙開発」を思いつきりやっている??

「で、サバティカル中というのは、そういうVPで生きていく世界を選ぶか、やっぱりもうちょっとお金をもらうために所謂『働く』ということを選択するか、をまだ決めていないという状態なの。ま、サクラの場合はほぼ間違いなくVPの世界で活躍すると思うけどね」

その時、ちよつと強い風が吹き、前を歩いていたおじいさんの帽子が飛ばされた。

ミチは反射的に飛んできた帽子をつかみ、おじいさんに渡した。

おじいさんは「ありがとう、おじょうちゃん。助かったよ」と感謝の言葉を口にした。

同時にどこからか「ピー！」という軽い警告音が鳴った。

「あれ？おじょうちゃん、ワシのVPを受け取ってもらえないのかな？」

「え？」困惑しているミチの手を引っ張って珠子は小走りに歩き出した。

ミチはVP口座を持っていないのでエラーになってしまったようだ。

# 限りある時間なのに学校生活だけを 送っているなんて

## 一八歳の区長ケンタ

「次は交換日記の八二ページ！」

ミチは言われるままにページを開いた。

【私たちってまだ一六才。でも、もう一六才。人生って短いよね。まだ何をしたいのかもはっきりしていないから仕方ないけど、いろんなことをやって、本当に自分がワクワクすることに会いたい。でも、学校ではみんな同じ勉強をみんな同じ時間割でやって……つまんない！机に座っているだけじゃ、本当の知識も経験も身に付かないって言うじゃない。それなのに机に縛られている。集団生活を送らないと社会性が身に付かないから、学校に行くべき？本当にそうなの？どちらにしろ社会に出たら、社会でもまれるじゃん。それが経験？あれこれ経験できずに一つか二つの経験で人生は終わっちゃわない？あー……】

他人が読んでもよくわからないかもしれない鬱積があふれ出した文章がそこにあった。ミチ本人が書いたものだからミチにはよく分かる。言葉に仕切れないだけだ。

目の前に緑が美しいグラウンドが広がっていた。

「ケンタくーん！」珠子がネット裏から声をかけた。

サッカーの練習をしている割と小柄な男の子（といっても大学生くらいか？）が珠子に気が付き手を振った。

「ケンタくんは一八才。半年前の選挙で区長になったの」

「クチョー？」

「市長とか町長とかの区長よ。ニュースでも話題になった。一八才というのもあるけれど、小学校・中学校には行かずに自宅でVR教育を受けてきたの。VR教育は個人個人に適切にカスタマイズされた教育を施せると以前から言われてきたけど、AIが人間のコミュニケーション能力を育てるほどのことができるようになったのは、ケンタくんたちの世代からね。ま、ミチがいつも文句言っていた『学校の先生しかやったことがない先生が、進路指導なんてできるの？』というのがあったのね。それをAIとVRが解決したの。」

サッカーボールを蹴っていたケンタの前にスクリーンが現れ、ケンタはボールを抱えたままスクリーンの人物と話し出した。

「区長と言っても、ああやって仕事をすればいいから、サッカーの時間も取れるのよね。自宅で一人でVR教育を受けていても、体育だけはこういうリアルなグラウンドで、生徒がリアルに集まってやるの。ケンタ君もそうだった。あれは区役所のAIロボットの部下からね。AI・VRで勉強したケンタ君だからこそ、AIの部下とも上手に付き合えるのよ。AIロボット職員が増えた今ではケンタ君のような勉強方法をやってきた人間でないと務まらないでしょうね」

「じゃあ、今は普通の……昔のタイプの学校って、もうないの？」ミチはやっと口を開いて質問

した。

「一方的に教えるだけの学校って絶滅危惧種、かな」と珠子は答えた。続けて、

「座学ではなくて、実体験こそが人を育てる。ちょうどミチの時代にアクティブラーニングがどんどん導入されたじゃん。それはある意味正解。でもなかなか色々な本当の実体験を生徒みんなにやらせるというのはとても難しかったのをVRができるようにしたの。名前の通りあくまでバーチャルだけだね。でもほとんど実体験。時間があれば、体験させてあげるわ！ 楽しみにね」

「ふーん……なんかとにかくすごいなあ。ケンタクくんって私たちが想像できないくらいの人間なんだろうなあ」

全く別の生き物を見るような目でミチはケンタを見た。

「そうでもないよ。昔でいうSNSみたいなものにケンタクくんはいつもぶつくり書いている。できないとか、困ったとか、こんなんじゃないや区長にならなきゃよかったとか、本当はサッカー選手になりたかったのに、とか。そういうことをオープンにしているから人気があるっていうこともあるけどね。文句ばかり書いているところはミチにちよつと似ているかも。気が合いそうだよ、ミチと。ミチが本ばかり読んでいたのと、ケンタクくんがVRで学習してきたのって、ある意味同じだね。二人とも頭でっかち」

自転車が止まる音が二人の後ろでした。アラフォーに見える女性が乗っている。

「ケンタ区長、頑張っているね」

「康子さん、ご無沙汰」

「あら、たまちゃん。おばあさんは最新新しいことにはまっているのよ」

『おばあさん』って誰だろう？ とミチは思った。

「何始めたの？」

「前会った後に『地球生物学』と『獣医学』の勉強を始めて、博士課程を取って、スマトラでしばらくボランティアやって、今はその『すみだ水族館』で働いているの。久しぶりの給料生活ね。で、はまっているのは『チンアナゴ』」

「康子さんって、前は確かアフリカを中心としたITベンチャーで気象観測のデータ分析とかやってたんじゃなかったっけ？」

「あれも面白かったけど、もう八〇才じゃん。また別のことをやろうと思ってね。若いときから今みたいなVR教育とかあれば、もつと色々な人生を歩めたのにね」

そして、「そっちの彼女、ぜひ、チンアナゴを見に来てね」と言つて、水族館の入館チケットを渡して立ち去った。砂から頭を出した棒のような魚のチンアナゴがゆらゆらと動いている動画が「リアルタイム」という文字と共に印刷されている。狭い世界で暮らすチンアナゴに自分は似ているかも、とミチは思った。

「八〇才って言つてた……ほんと？」

「そんなもんかもね。バイオ医療とアンチエイジングが急速に発展して、今は一二〇才くらいでも見た目も若くて元気に色々挑戦している人は沢山いる。人生、何度も色々なことに挑戦できる

時代なの。VRを使えば同時に並行していろいろなことを学べるし、実体験の仕事だって、みんな二、三個は全く違うことをやっている。やりたいことを本人のペースや特性に合わせながらスケジュールを作ってくれたり、いいメンバーとつないだりしてくれるサービスの発達もAIのおかげね。」

ミチは自分の変化に乏しいのつぺりとした毎日を思い出していた。

「たぶん、今だったら、ミチの『ちよつとだけ旅に出ます』の『プチ家出』も、ちゃんと家出計画を作れて、必要に応じてVR体験できて、すぐに満足して家に帰ったかもね」

珠子にそう言われて、ミチはなんだかちよつと恥ずかしくなった。

## テクノロジーに飼われている人生なんて

「向こうの島エリア」の屏風職人 正信

またしても、珠子の先導で、速足であるく。

「はい、一五ページ」

交換日記のページをミチは開いた。

【みんなSNSとかに没頭してるけど、なんか「つながらない恐怖」にまみれているだけのよう  
に思う。いいじゃん、人間は孤独でも。なんか面倒くさい。どこにいつても電波は飛んでいるし、  
監視カメラはあるし。テクノロジーがなんでもかんでもつないじやって、見えるようになってしまっ  
て、なんでも簡単にできるようになってしまっ……。それって、実はテクノロジーに「飼われて  
いる」だけじゃないの？ コンピュータとかない世界で、人間らしい生き方をしてみたいなあ】

交換日記を始めたところに、ミチはSNSでちょっとしたイジメを受けていた。周りの学生の興  
味の対象が違いすぎるに、無理やり話を合わせていたのを一人の同級生が気持ち悪がったのが始  
まりだった。珠子はその様子を見ていて、ミチにもちかけたのが交換日記の始まりだった。

「で、この辺りがあのときミチが来たかった場所……ということかな」

細い水路に囲まれた地域があった。

「みんなは『向島』をもじって『向こうの島』って呼んでいるわ。他とは違うって意味ね」

ここから見るとちよつと古びた昔の街にしか見えない。

「『向こうの島』にはITやロボットのテクノロジーは一切入っていない。持ち込んでもいけない。通信も遮断されていて、料理も全て手作り、電気も来ていないんだって」

その時、二人の横にトラックが音もなく止まり、男性が大きな板を持って出てきた。

「よ！ たまちゃん。お母さんはまだ帰ってきていないのかい？ 腕は上がったのかな？ 師匠が話を聞きたがっていたぜ」

「正信さんは、屏風職人なの。正信さん、その板は屏風用？」

「おーよ！ 新作を思いついちゃって、勢いで書こうとしたら、なんと板がなくてな！ しつかなないから慌てて買い出しよ」

なんか寅さんのようなしやべり方だ。

「向こうの島に住んでいると、人間本来の想像力っていうのか創造力っていうのか、どんどん湧き出てきちゃう。すげーよ、ここは。でも、車も入れられないから、ちよつと大変だけだな。ま、その大変さこそが人間らしい力を生んでいるということだまちげーねーけど」

「ミチ、『向こうの島』の中をちよつと正信さんに案内してもらえば？ 私ほちよつと先に行つて様子を見てみたいことがあるから」

そういつて、珠子はミチの背中を押した。「正信さん、よろしく！」そういつて、珠子はどこかに走つていつた。



「おじよーちゃん、名前は？」

「ミチです」突然置いてきぼりにされたミチは仕方なく正信について行った。島の中の道は細くて入り組んでいた。道の両側は江戸時代のような木造家屋が並んでいる。やたらと目の前をネコが横切る。

その狭い道を歩く人たちのスピードが速い。正信は大きな板を持っているのに、ミチは軽い駆け足でないと追いつかない。みんな慣れているようで、結構な人の数がすごいスピードで歩いているのに、お互いぶつかったりはしない。ミチの時代のみんな歩きながらスマホをして、あちこちでトラブルを起こしているのとは大きな違いだ。みんなちゃんと前を向いている。その間を、時々、自転車がすごいスピードで蛇行して暴走していく。それも大丈夫のようだ。

「おじよーちゃんもあれか？ 家でVRとかで計画的に勉強とかしてんのかい？」

「いいえ」とだけミチは返事をした。

「ああいう、人生、目的をしつかり立てて、それに向かって効率的に学べ！ みたいなのは俺は合わない。ま、俺がおじよーちゃんの時代にはVR教育なんてなかったけどな、ははは」

その笑い方を聞いて、ミチは気が付いた。同級生の片岡君だ。二〇年経った片岡君が大きな板を持って歩いている。

「人生、分らんもんじゃないかい？ だから面白い。俺は本当はミュージシャンになるつもりだったのに、色々出会いがあつて、今は屏風職人さ」

変わったパンクロックバンドで金髪でギターを弾いていた片岡君だ。間違いない。片岡君はミ

チのことは覚えていないみたいだけど。

「おじよーちゃんは、何になりたいのかな、今は」

「え？」

それがよく分からなくなつてプチ家出したらこの世界に来てしまったのだ。

「ま、とにかく歩くことだな。それも無意味に。この無意味つてのが大事なんだよ」

「歩く？ 無意味に？」

「そ。歩けば、何か思わぬことや人と出会える。目的に向かって歩かなくても、寄り道にこそ未来があつたりするもんだ」

プチ家出をして、普段よりは間違いなく沢山歩いた今日がそういうことなのかな、とミチは思った。

「分かんから、知らんからこそいい。えーと、しらんでーびてい……じゃないな、えーと」

「セレンディピティですか？」

「そうそう、それぞれ。高校生みたいだけどよく知っているねえ。その偶然の出会いをコンピューターやテクノロジーが削り取っている。ちまたでは、大きなマップの上に沢山の人が表示されて、一人ひとりの『こうしてほしい』と『こうしてあげる』が漫画の吹き出しみたいにリアルタイムで表示されるテクノロジーがあつて、人をマッチングさせるサービスとかあるようだけど、えーとなんて言つたつけない、ダイナミックポイントイチとかいってたかな、ちゃんちゃらおかしい。人は歩いてたまたま出会うもんだ。この島にいれば人間としてまともになるぞ。どうだ、おじよー

ちゃんもここで職人にならないかい？」

気が付くと、少し広くなった道の両側には多くの伝統工芸のお店が並んでいる。桐箆筒、べつ甲、かんざし、箸……。浮世絵もある。ステラさんの浮世絵のお店はテクノロジー満載だったからこの島には作れなかったのだろうか。

「ここが俺の店だ」

沢山の屏風が並んでいる。この時代に屏風を買う人なんているのだろうか。

「せっかく向こうの島に来たんだから、とりあえずしばらくなんも考えずに歩いてみるよ。いいぜ。それが向こうの島の醍醐味だ。なんかに出会う、かもしれないぜ。じゃあな」

と言つて、正信は手を振つて店の中に消えていった。

置き去りにされたミチは戸惑つたが、とにかく歩き出した。

色んな人が早足で歩いている。みんないちいちミチに興味を持って、「お、見かけねえ顔だな。レトロな制服着て、何屋に弟子入りしようとしてるんだ？」とか「おなかすいているんじゃない？ ダンゴ食べておいぎよ」とかどんだん声をかけられる。やたらおせっかいであることもこの向こうの島の特徴であるようだ。

行く先を決めずに歩くなんて、これまでしたことなかった。今日のプチ家出までは。ましてやこの島の『醍醐味』とやらの『何も考えずに歩く』という経験も初めてだった。

ミチはついついいつもの癖のようにスマホを取り出して、MAPアプリを開いた。「エラー」とだけ表示された画面を見て、ミチは自嘲気味に「そうよね」とつぶやいた。

その時、小柄な少年が突然現れ、ミチの手からスマホを奪い、逃げ出した。

「あー！」

ミチは少年を追った。先ほどから歩いていた狭い道よりもさらに狭い路地を少年は駆け抜けていく。いくつもの角を曲がり、最後は右側にある植木鉢だらけの路地に駆け込まれて、見失ってしまった。

ミチは息を切らしてしばらく佇んだ。ふと見ると、足元に三毛猫がそろそろと近づいてきて、ミチの足にほおずりをした。

「あー、スマホ取られちゃった……」ミチは三毛猫を撫でながらつぶやいた。

「やられちゃったね。あんなレトロなもの見せびらかしていたら狙われて当然だよ。マニアがいるからね。高く売れるそうだよ」という声があった。すぐそばの窓からパーマ頭のおばさんが腕を組んで覗いていた。ミチは軽く挨拶して、歩き出した。

少年を追いかけているうちに、ミチは完全に居場所も方向も分からなくなった。道が狭すぎてスカイツリーすら見えない。

ほんの一日前のミチであれば不安でいたたまれなくなっていたかもしれないが、なぜか心の中は落ち着いていた。「歩けばなんとかなる」という自信のようなものがあつた。

しばらく歩いていると「あんだ、ミチちゃんでしょ」とおばさんに声をかけられて立ち止まった。「珠子さんという人がそろそろ入り口まで帰ってきて言ってたよ」と伝えてくれた。

歩いていると、次から次に「あなた、ミチちゃんでしょ、珠子ちゃんが入り口で待っている」

と何人からも声をかけられて、みんな入り口の方向を教えられて、問題なく珠子が待っている入り口まで間もなくたどり着けた。

「どうだった？」 珠子がいたずらつ子ぼく尋ねた。

「不思議な場所だけど、なんか懐かしかった。人が人であるって感じもして。昔は日本中こんな感じだったのだろうなあ、って。ここもいいな。いっぱい歩いた。何歩歩いたんだろう」

そのミチの言葉に反応して地面に《5963歩》という数字が表れた。

「向こうの島を出ると、こうなつちやうのよね」

珠子が申し訳なさそうに言った。

# 血縁だから家族だなんて

本当の珠子

「ちようど時間だから行くよ！ はい、九六ページ」

家出をする一週間前の交換日記のページだった。

【ウチはお父さんもお母さんも悪い人じゃないし、変な干渉もしないし、家族に対してはそんなに文句はないけれど、なんか最近思うのよね、「家族って何？」って。最近読んだ社会学の本の影響かなあ。血縁って、DNAの情報のこと？ でも私も「女の子」だから、そのうちたぶん結婚して、どこか別の「家族」を作るのよね？ それでもいいけどさ。でも、相手や出来た子供と一緒にずーっといるのが当たり前の「家族」って何なんだろう？ 「家族」なんて必要あるのかな？ もちろん、誰かとずーっと過ごしたいという気持ちは私にもあるけど。あー……分かんないし、何を書こうとしたのかも分からなくなってきた】

つい最近書いた内容だけど、この感じも「プチ家出」を執行してしまった理由の一つであることは間違いない。家族が少し鬱陶しくなっていた。

「はい、到着。この家よ。そして、みなさんもまもなく到着」

そういつて珠子は二本あるスカイツリーの方角を指さした。車ほどの飛行物体があつという間

に頭上に来て、静かに目の前に着陸した。

飛行タクシーからは、まず男の子が走り出てきて、そのまま家の中に入っていった。続いて、背の高い男性が出てきた。

「ターマ、ただいま」

その男性は珠子のことを「ターマ」と呼んだ。

「お帰りなさい。ブラジルにはお箸の材料になる面白い木はあったの？」珠子が尋ねると、

「ほら、これ！」と胸のポケットから網目模様のような柄が入った箸を男性は取り出した。

「なんかニシキヘビっぽいだろ？　あまり使われない木らしく、そこらへんに捨てられていたんだ。でも、加工もしやすいし、伝統の磨き手法でやってみたら、こんな柄が現れてさ。大発見！」

アフリカ系に見える男性は流暢に日本語をしゃべっている。

飛行タクシーのドアから一人の女性が出ようとしていた。ミチを見つけ、しばらくそのまま立ち止まった。そして、やっと

「ミチ？」と、ちいさく声を上げた。

三〇代くらいの女性である。ミチの方も彼女の顔から眼が離せなくなった。ほんの何秒かの時間だったかもしれない。とんでもなく「なつかしい」という感情が襲ってきたのだ。そして、すぐに気がついた。

「珠子——」

知っている珠子が二〇年ほど経つとこうなる、という顔がそこにあった。

「ミチ、ミチなの？本当にミチなの？」

足元がおぼつかない感じでその女性はミチに近づき、ミチの両肩に手を置いて、ミチの顔をじつと見つめた。

「ミチだ。ミチだ……」

そして目から涙があふれ出した。

「珠子、ま、ここではなんだからとりあえず中に入りましょう」と、ここまで一緒に二〇三七年の向島を歩いてきた高校生の『珠子』が涙で声が出なくなつた『珠子』に声をかけた。

家の中に入り、「珠子さんから質問攻めに会う前に、改めて自己紹介しておくわ」と高校生の珠子が話し出した。

「私の本当の名前はターマ。見てわかるように、珠子さんが高校生の時の姿をしたパーソナル・アシスタント・ロボットなの。略してP A R。響きがバカみたいだけどね」

ミチは説明を始めた珠子を見つめて固まっていた。

「この時代はP A Rはいっぱいいるけど、人型で、かつ、自分の若いときにそっくりなP A Rを持つとうとする人って、それほどいない。昔の自分をそばに置くことで、いつも人生の原点を思い出して道を踏み外さないようにするために、たまにこういうP A Rを作る人もいるけどね」

「……私の場合はちよつと違うわ」

人間である本物の珠子はやつと少し話せるようになってきた。

「あの日、突然ミチが消えちゃつたじゃない。何が『ちよつとだけ旅に出ます』よ。今日はあの



日からちやうど二〇年。朝から何度もミチのことを思っていた」

ミチはじつと珠子を見つめていた。何が起こっているのだろう。

「ミチは帰ってくる。必ず帰ってくる。そう信じてきた。でも、自分は段々年を取って、ミチとの日々がどうしてもどうしても薄れていくような気がした。ミチが帰ってきた時に、当時の私としてミチを迎えてやりたい。そう思つて、五年くらい前にこのターマを作つたの。当時の情報でできるだけ入力して。だからしゃべり方とかも高校生だった時の私とそっくりでしょ。ターマは、私を手助けするためのPARではなくて、いつか帰ってくるミチのためのPARのつもりで作つたのよ。でも、まさか……まさか高校生のままのミチが帰ってくるなんて……」

そこまで喋ると、珠子はまた泣き崩れて、言葉にならなくなつた。

ターマがケーキとお茶を準備している間に、二人はポツポツと話をした。ミチは自分がどうしてこの時代に来てしまつたかは分からないこと、また、珠子はこれまであつた色々なことの話をした。

珠子はポツワナ人のミスター・パッカーと「家族」になつていた。ニシキヘビの柄の話をしていた先ほどの男性だ。「結婚」という形式をとることは最近はあまりないらしい。「家族」という言葉を何度も珠子は使つた。

なんと、珠子には「家族」は三つあるそうだ。

このミスター・パッカー（ファーストネームがバックというそうだが）とは、彼がこの向島に「日本の箸」の職人修行をしに来ている時に知り合つたそうだ。珠子も箸職人である。ここにいる息

子は、養子。その養子とは別に、珠子には自身が生んだ娘がおり、今はエストニアにいて、最先端のIT教育学校に行き、エストニア人の家族と住んでいるようだ。来週にはそちらに行つて、珠子が大好きな一日中写真撮影を楽しむ生活を始めるらしい。つまり、今一緒にいるこの家族とは別の家族と。

加えて三つめの家族の話も珠子はしてくれたが、ミチは理解ができなくて、ほぼ思考停止状態になりつつあった。その家族は定住はせずに、あちこちの国を移動しているけれど、生活用品や家具などは現地で3Dプリンターなどを使って全く同じものが作られるので、引越しの手間はほとんどかからないそうだ。「朝目覚めた時はいつも同じ部屋の風景なので、どこにいるのか分からなくなるのがちよつと困るけど」と珠子は苦笑いをしながら説明してくれた。

「だって、突き詰めれば、家族って、『一緒に経験したこと』でつながっているのよね。一回の人生でこれだけ色々な経験ができる時代になったのに、全ての『経験』が一つだけの家族と共にある、つていう方が無理でしょ」

と、珠子はミチに分かりやすく説明したつもりだが、やっぱりミチにはさっぱり分からなかった。

ただ、「家族なんて」という思いと共にあった「縛られた感じ」が少しほぐれた気がした。

珠子と話しているうちに、あまりに色々あったこの一日のバタバタで少し薄れていた自分の家族のことが、やつと気になりだした。

それを悟ったのか、珠子が切り出した。

「ミチのお父さん、お母さんも元気よ。世代が上だから、私みたいな複数家族の生活ではなくて、ある意味、昔のまま。たまにミチの思い出話をするために会いに行ってる。ミチがいなくなつて本当に大騒ぎだった。私が唯一の手掛かりみたいに思われて警察で尋問みたいなことも随分された。本当に神隠しにあつたとしか思えなかつた。ミチのお母さんの憔悴した様子は本当に気の毒だった。だから、実は……私は交換日記のミチの字を真似して、ハガキを書いてお母さん宛てに出したの。いけないことかもしれないと思つたけど、『元気にしているから探さないで』つて。それも友達が住んでいるエストニアから。それが今のもう一つの家族なんだけど。その手紙は私を書いたつて言うのは、今もお母さんにも言つていないの。でもたぶんその手紙のおかげで、お母さんもお父さんも段々元気になつていった。でもいつかは言わなきゃつて、ずーつと思つていた。辛かつた。だから二〇年の今日こそ言おうつて、今朝起きた時に決心したところだつた」

ほんのさつき「行つてきまーす！」と家を出てきたばかりのミチは、ドアの隙間から見た母と父の横顔を思い出していた。

そして、「家族つて何なのだろう」と改めて思った。「家族なんて」とはもう思わなかつた。

## エピソード

たった一日で二〇才の年の差となった珠子が言った。

「ミチ、交換日記の最後の方のページを見た？」

ターマが交換日記をミチに差し出した。

そこには、最後にミチが書いた『ちよつとだけ旅に出ます。心配しないでね。親にも言わないで』という文章の後に、何十ページも珠子が追加したページがあった。ミチが失踪した直後は、「どこに行つたの!？」とにかく早く帰ってきて!」という叫びのようなメッセーヂが延々と続いたが、あるところからは、珠子の日常生活や人生の岐路での想いを綴つた答えてくれる相手のいない一方的な交換日記となつていた。

「最初はつらかったのだけど、この交換日記を書くことで私も救われたことが何度もあつた。ミチに言うのも本当は変なことかもしれないけど、ありがとう」

また「V P 口座がない」という小さな警告音がどこかで鳴つた。

ターマが言った。「なんとか連れていきたいと思つていた所には行けた。交換日記に書いてあつたミチのモヤモヤが二〇三七年にはどうなつてゐるか、見せたかつたの。間に合つてよかつた。急に消えて元の時代に戻つちゃうんじゃないかと、ずーつとヒヤヒヤだつたよ。どうだつた？」

二〇三七年は？」

「どうって……」ミチは言葉に詰まった。生きていさえすれば、こういう時代になっていたのか。ここにはミチのモヤモヤをワクワクに転化してくれる多くのことがあるのは間違いない。

「ちよつと遠すぎる家出をしてきちゃった、という感じかな」

ミチは深くため息をついた。

珠子とターマとミチは夕暮れになりつつある向島を歩いた。

川べりには移動商店街がやってきていてにぎわっている。一部のお店は今到着しようとしているらしく、空からも舞い降りてきていた。

「ミチ、どうする？ お父さんとお母さんの所に今から行ってみる？ それともうちよつと心を整理してから行く？」珠子がミチを覗き込んで尋ねた。

「どうしよう」とだけミチは返事をした。二〇年経ってしまった父母に会うのはちよつと怖いという気持ちもある。

「ところで、ミチって、どうしてミチという名前をお父さんとお母さんが付けたか知っている？」

「……？ たぶん聞いたことないな」

「ミチがいなくなつてから、しょつちゅうお母さんに会いに行つてたから聞いたんだけど、『いろんなことに通じるように（通…ミチとも読む）、そして、いろんな未知のことに挑戦するように』という願いを込めたんだって」

「へー、知らなかった」

「だから、ミチが学校に興味がなく、他の事ばかりを知りたがったりやりたがったりしていたのを、お父さんもお母さんも心の中では喜んでいたそうよ」

「知らなかった」ミチは突然両親に会いたくなつた。

夕焼けが雲の一部から始まろうとしていた。赤くなりつつある部分を川越しにミチは立ち止まって見ていた。

ふと、『おじようちゃん！ 時計回りのままもう一周いっちゃうと……』という百花園のおじさんの言葉が頭によみがえつた。

（そうか、もしかしたら、百花園を反対方向の反時計回りに回ると元の時代に戻るのかも）

そう思いついたミチは、珠子とターマにその話をした。

「そんなこと聞いたこともないけど。やってみる？ でもお父さんやお母さんにまずは会いに行かない？ 驚いちゃうと思うけど」珠子も決めかねている。

ターマが付け加えて言った。「それか、一緒にこの時代に生きない？ そして新しい交換日記始めない？ 私も参加したいから」

ミチは心の中で何度も何度も自分に問いかけてみた。

そして、「百花園に行ってみる」と言った。

まだ心は定まっていらない。でも、百花園で反時計回りをせずにこのままこの世界で生きていてはいけない気がした。

百花園の入り口についた。

「本当に行くのね。ターマと私はここでしばらく待っている。ミチの道は自分で決めなさい」

珠子とミチはしばらく抱き合った。ターマにも握手をして、ミチは百花園の中に入った。

朝来た道を反時計方向に歩き出した。

空はすっかり深い夕焼け色に染まっている。

振り返ると珠子とターマが並んで立っている。

ミチは前を向いて歩き出した。

確かにこの二〇三七年の方が今の自分には向いているという気もする。でも自分の時代を自分の足で歩かなければいけないとも思う。

戻っても戻らなくても、自分の人生を生きよう。

## 富士通 S F プロジェクト

本 S F 小説は、平成二八年度に富士通株式会社テクニカルコンピューティング・ソリューション事業本部が主催した『富士通 S F プロジェクト』にて生まれました。「二〇三七・五年」と「まち」をテーマに未来の日常について語りあい、S F 小説をつくりました。本プロジェクトは、株式会社フューチャーセッションズ、作家勢川びきさん、墨田区の皆様他の協力を得て、実現いたしました。





---

## 2037.5 年を生きるミチ

2017年2月1日 初版発行

著者 富士通 S F プロジェクト・勢川びき

発行者 富士通株式会社  
テクニカルコンピューティング・ソリューション事業本部

---



この小説はCC BY-SA 4.0 国際 (<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>)  
で提供されています。



